拓殖大学北海道短期大学研究紀要 第 4 号：14-30（2024）

人間の包摂的把握のために

橋本 信 *

Toward the inclusive understanding of the humankind

Hashimoto Makoto

キーワード:人間的普遍性、社会的特殊性、身体的個別性、人新世、AI 新世

１． 人間が問われる現代

現代ほど人間が問われている時代はない。総合人間学会の書籍として出版された本の題名が『人新世と AI の時代における人間と社会を問う』（本の泉社 2022 年）と『ポストヒューマン時代が問う人間存在の揺らぎ』（本の泉社 2023 年）であることは（1）、このことを象徴する一つの有力な実例である。本の題名にある「人新世」と「AI」という言葉はいわば 21 世紀を代表するキーワードであり、人間が問われる際のキーワードでもある。

「人新世」(the Anthropocene)とは、端的に言えば、現生人類が地球システムに否定的な影響を与えている地質年代のことである。「プラネタリー・バウンダリー」の提唱者であるヨハン・ロックストロームは、雑誌『世界』「特集１　人新世とグローバル・コモンズ」で次のように述べ、人間という存在は地球という「惑星の上にある大きな世界」にもはや成り上がってしまっているとともに、だからこそ「地球システム全体の管理責任受託者」としての責務を果たさなければならないとする。

「人新世の時代に、プラネタリー・バウンダリーの範囲内でグローバル・コモンズを管理するという困難な課題に取り組むには、人間と惑星の関係におけるパラダイムシフトがなくてはならない。また、各国政府や国際機関には、惑星の管理責任（ﾌﾟﾗﾈﾀﾘｰ･ｽﾁｭﾜｰﾄﾞｼｯﾌﾟ）を促進し、実行に移すことが求められる。」（2）

「私たち人間の社会は、もはや大きな惑星の上にある小さな世界ではなく、小さな惑星の上にある大きな世界である。私たちは地球システム全体のスチュワード（管理責任受託者）として、すべての個人のために、いかなる時に、どんな規模でも、グローバル・コモンズを管理する必要があるのだ。」（3）

「地球環境概観第 5 次報告書　上」（国連環境計画編 2015 年発行）においても、「人新世 Anthropocene」は、「直近の完新世に続く、新たな地質学上の時代の名前として、科学者によって用いられている用語で、この新たな時代は主として人類の活動が原因で地球の大気圏、生物圏、水圏に著しい変化がもたらされたことが特徴である」、という表現で解説されている。（4）

2023 年が観測史上最も暑い年になったと報じられ、国連事務総長が「地球温暖化の時代ではなく、地球沸騰化の時代に突入した」という趣旨の発言が話題になった現在において、「カーボンニュートラル」とか「脱炭素社会」というキーワードは「人新世」時代に人間の

* ：農学ビジネス学科　連絡先：otokam99@yahoo.co.jp

行動が問われている事象を示し出しているのである。

人間の行動だけではなく、人間の知的活動そのものも問われている。それが「人新世」になぞらえて、「AI 新世」と呼ばれる事象である。

「AI」(Artificial Intelligence)とは人工知能のことであるが、人工知能学会のホームページでは以下のように紹介し、「AI」についての多義的理解の可能性を示唆している。

「『人工知能』とは何だと思うでしょうか？まるで人間のようにふるまう機械を想像するのではないでしょうか？これは正しいとも，間違っているともいえます．なぜなら，人工知能の研究には二つの立場があるからです．一つは，人間の知能そのものをもつ機械を作ろうとする立場，もう一つは，人間が知能を使ってすることを機械にさせようとする立場です．そして，実際の研究のほとんどは後者の立場にたっています．ですので，人工知能の研究といっても，人間のような機械を作っているわけではありません．」(5)

日本における AI 研究者で著名な松尾豊は、人工知能学会による紹介をもう少し具体的な用語を使って、以下のように説明している。

「いまは人工知能に二つの流派ができています。一つは従来どおり、人間のような高度な知能、人間よりも賢い知能の実現を目指そうとする流れ。これは『強い AI』とも呼ばれます。もう一つは『弱い AI』。現状のテクノロジーでは高度な知能はできないとしても、普通のコンピュータよりはもう少し知的で、賢くみえるような仕組みを作っていくという方向です。」(6)

そして、雑誌『Newton』2024 年 1 月号はその第 2 特集を「Chat GPT の未来」と題し、「対話 AI の知能は人類の予測をこえはじめた」と書くとともに、この特集の最後の文章を以下のように表現することによって、AI の進化への問いを私たち人間への問いへと折り返している。

「AI の進化によって、人類の未来が大きく変わっていくことは間違いありません。しかし、それがどのような未来かを決めるのは、AI ではなく人間であるということを私たちは忘れてはならないでしょう。」(7)

人間への問いは従来の射程を超えているかもしれないと思わせるのが、全世界でベストセラーになった『サピエンス全史　上・下』（2016 年）であろう。最終章の第 20 章が「超ホモ・サピエンスの時代へ」と題されている書物で、著者ユヴァル・ノア・ハラリは、135 億年前に物理的現象と化学的現象とが始まり、38 億年前に生物学的現象が始まり、7 万年前に歴史的現象が始まったことを冒頭の歴史年表で明記する。そして、最終章では次のように述べる。

「サピエンスは、他のあらゆる生物を支配するのと同じ物理学的力や化学反応、自然選択の過程に支配されている。自然選択はホモ・サピエンスに、他のどの生き物よりもはるかに広い活動領域を与えたかもしれないが、これまでその領域にもやはり限度があった。サピエンスは、どれだけ努力しようと、どれだけ達成しようと、生物学的に定められた限度を突破できないというのが、これまで暗黙の了解だった。だが二一世紀の幕が開いた今、これはもはや真実ではない、ホモ・サピエンスはそうした限界を超えつつある。ホモ・サピエンスは、自然選択の法則を打ち破り始めており、知的設計の法則をその後釜に据えようとしているのだ。」(8)

「自然選択の法則」を打破する「知的設計の法則」は次のように捉えられ、テクノロジーに焦点化されている。

「本書の執筆時点で、知的設計は以下の三つのどの形でも自然選択に取って代わりうる。

すなわち、生物工学、サイボーグ工学（サイボーグとは、有機的器官と非有機的器官を組み合わせた生き物のこと）、非有機的生命工学だ。」(9)

ホモ・サピエンスたる現生人類は自らをアップグレードして「ホモ・デウス」になるのだとする『ホモ・デウス　上・下』（2018 年）では、「人間至上主義」から「データ至上主義」への転換が予測されている。しかし、注目すべきは、『サピエンス全史　下』の「神になった動物」と題した「あとがき」で以下のように述べていることである。

「七万年前、ホモ・サピエンスはまだ、アフリカの片隅で生きていくのに精一杯の、取るに足りない動物だった。ところがその後の年月に、全地球の主となり、生態系を脅かすに至った。今日、ホモ・サピエンスは、神になる寸前で、永遠の若さばかりか、想像と破壊の神聖な能力さえも手に入れかけている。・・・・・・不幸にも、サピエンスによる地球支配はこれまで、私たちが誇れるようなものをほとんど生み出していない。（中略）自分が何を望んでいるかもわからない、不満で無責任な神々ほど危険なものがあるだろうか？」(10)

ハラリの著作は、現生人類に対して「地球システム全体の管理責任受託者」という責務を問いかけているように読めるのである。しかし、同時に注目すべきは、「人間至上主義」という特異な日本語の原語が Humanism であるということである。「人間至上主義」という発想は、その裏返しとして、人類には絶滅が待っているという発想につながらざるを得ない。それは「人類・文明絶滅の思弁的実在論」という副題を持つ『人新世の絶滅学』（星野克美著 2022 年鳥影社）という書籍刊行に端的に現われている。

他方、Anthropology を原語とする人類学では「人間を超えた人類学」が「マルチスピーシーズ人類学」として提唱されている。日本の代表者の一人である奥野克巳は次のように述べる。

「マルチスピーシーズ人類学は、人間のみを見ようとするだけでなく、人間を超えた先に広がっている生命の風景の記述に特大の関心を寄せている。そのことにより、人間だけ、動物だけ、あるいはモノだけを探求していては、見晴るかすことができない景色を見ようとしている。それは、レヴィ・ストロースのいう人類学的なヒューマニズムを超えて、これまでの人類学の全体像とは大きく異なる『人間を超えた人類学』に挑むための新たな幕開けである。・・・『人間を超えた人類学』が立ち上がることによって、我々は『人間の耐用年数はあとどれほどか』という喫緊の課題へと挑む足掛かりを得るであろう」(11)

「マルチスピーシーズ人類学」は「人新世」という時代認識が背景にあり、「人間例外主義」を乗り越えて求めているものを奥野克巳は次のように表現する。

「人間は、これまで自らが他の生物種とは違った例外的な存在であると自認しかつその力を信じて、自然から奪い取れるものを奪い取り、好き勝手に振舞ってきた。その結果として、地球が深く傷つけられてしまったのだとすると、・・・、人間以外の存在が持つ行為主体性に光を当てて調査研究することは、人新世の時代に人間例外主義を乗り越えるための一つの方策になりうるだろう。」(12)

「人間以外」の多種多様な生物種との連関をも含めて、「あらゆる生物種の行為主体性」を焦点化することによって、「マルチスピーシーズ人類学」研究の進展が期待されている。そのことを奥野は以下のように表現する。

「単一種としての人間ではなく、複雑に絡まり合う多種へ。人間だけに特権を与える人間例外主義ではなく、あらゆる生物種に行為主体性を認めるマルチスピーシーズ共同体へ。人

間と動物という二元論思考ではなく、群れとなって、絡まり合いながら現れては消え、消えては現れる多元的な生成へ。地球の環境変動の問題が大きく取り沙汰される人新世の時代に現れたマルチスピーシーズ人類学は、こうした視点移動によって、別のしかたで考え、書くようになり、今またマンガというメディアと結び合って、さらなる研究の進展を遂げようとしている。」（13）

「マルチスピーシーズ人類学」研究において重要なキーワードは「人間以上(more than human)」である。「人間以上」の世界とは、「人間の共同体とそれよりも大きな人間以上の世界」のことであるとされ、さらに次のように述べられる。

「地上には人間の手が加えられなかった場所がもはや見当たらないとされる人新世の時代において、私たちは、『人間以上の社会性』について知る必要があるし、逆に、人間以外の存在の人間性（社会性）のことを想像し始めるようになったことを手がかりとして、『人間以上の社会性』がどのようなものであるのか探ってみる必要があるという。『人間以上の社会性』という概念は今日、広く環境人文学界隈で用いられるようになってきており、『人間以上の社会性』をめぐる問いは、社会科学や人文学、自然科学などの垣根を超えてあたらなければならない課題となったのである。」（14）

「人間中心主義」批判、「人間例外主義」批判、「人間至上主義」批判と表現できる多様な傾向は「ポストヒューマン」の多義性としても現れているが、多様な解釈が可能であるとしても、人間への伝統的であるとともに根本的な問いかけ、「人間とは何か」という問いに帰着せざるをえないものである。そのことを示している文章を以下に紹介したい。

「ポストヒューマン論が提起した重要な点の１つは、『人間とは何か』という問いである。人間は、動物、機械やテクノロジーとの関連で中心的で独立したものと思われてきた。しかし、とりわけＡＩによって人間と機械とテクノロジーが融合した時、それは人間と言えるのだろうか。また、動物に対する人間の優位性や独立性が疑問視された時に、人間はどう位置づけられるのだろうか。これらの問いが、ポストヒューマン論が投げかける『人間とは何か』をめぐる典型的な問いである。」（15）

われわれはいまや、「典型的な問い」である「人間とは何か？」をめぐる問いに向かって、「人間中心主義」批判・「人間例外主義」批判・「人間至上主義」批判などを踏まえたうえで、かつ踏まえるがゆえに包摂的な把握を求めて、自己反省的な論述を進めなければならない。

２．　人間の包摂的把握の論理

人間を包摂的に把握するための論理は、伝統的な論理学を手がかりにすると、類・種・個の論理と解されるのであるが、この論理把握はヘーゲル哲学によって、普遍性・特殊性・個体性（個別性）の論理として捉え直されている。ヘーゲルによれば、概念は普遍性、特殊性、個別性の諸契機を含むものであり、伝統的論理学では、全称判断・命題、特称判断・命題、単称判断・命題の論理が同様の意義を持っているが、概念の諸契機はそれぞれに以下のように捉えられている。

「普遍性、特殊性および個体性は抽象的にこれを解すれば、同一性、区別および根拠と同じものである。しかし普遍的なものが自己と同一的なものであるのは、そのうちに同時に特

殊的なものと個体的なものとが含まれているという意義を明からさまにもってのことである。さらに特殊的なものは区別されたもの、あるいは被規定性であるが、それは、特殊的なものが自己の内において普遍的であるとともに、個体的なものとして存在するという意義においてである。同じく個体的なものも、それは主体であるという意義、換言すれば、類と種を自己の内に含みそれ自体、実体的であるところの基礎であるという意義をもつ。これは諸契機が区別されていながらも不分不離であるあり方が定立されている姿であり、概念の明澄さである。けだし概念のなかではいかなる区別も何ら中断、混濁を起こすことなく、やはり透明であるからである。」（16）

人間概念とその諸契機である普遍性・特殊性・個別性の把握の論理は、さしあたり人間的普遍性、社会的特殊性、身体的個別性という三つの契機を不可分の一体とする人間という把握を論理の基本として具体化することができる。

同様な規定と捉え方が 1997 年にはすでに公表されていた。宇都宮芳明は放送大学教材として出版した『倫理学入門』で（17）、人間性をどのように考えているかを、近代以前の自然主義と 18 世紀の歴史主義と 20 世紀の実存主義の各節目を概観したうえで、次のように述べる。

「ところでいま、私という人間を取り上げてみると、私は、⑴まずは自然界に人類の一員として所属し、⑵次いで歴史的に規定された特定の社会のうちに位置し、⑶そのなかで私という個人として存在する。私は人間としてこの三つの契機をもつが、自然主義・歴史主義・実存主義は、人間のこの三つの契機のいずれかに限定して捉えているのであった、このことから三者の間に対立が生じ、人間性についての見解が三極に分かれるのである。」（18）

宇都宮の三つの契機はそれぞれ人間的普遍性、社会的特殊性、身体的個別性に照応するものであり、筆者の規定は宇都宮の表現の短縮版、あるいは概念化と理解することができる。宇都宮は当時以下のような問題意識でこの人間三契機論を提起している。

「すでに触れたように、自然主義の見方は古代ギリシアに生じ、歴史主義の見方は 18 世紀に生じ、実存主義の見方は 20 世紀に生じたが、現代ではこの三つの見方がいずれも有力で、鼎立する形をとっていて、このことが人間性についての統一的な見解をいっそう困難にしていると言える。人間性とは何かについて諸見解があるばかりではなく、そうした人間性そのものの存否についてもこのように見解が相違する。今日『人間性』についてさまざまなことが（たとえば、人間性の尊重とか、豊かな人間性とか、人間性の回復とか）唱えられているが、しかしそれがなにを意味するのは曖昧であり、ひとによって受け取り方が違うのも、こうした『人間性』にかんする見解の不一致によると見てよいであろう。そこで次章から、この三つの見方のそれぞれについて今少し立ち入って検討し、そこからどのような倫理が説かれることになるか、またそこにどのような問題点があるのかを見ていくことにしたい。」（19）

各契機は全体の構成要素であるとともに、契機それぞれに自立的全体化が生じる場合があることをヘーゲルはつとに指摘するのであるが、宇都宮も「三つの見方」をそのように捉えたうえで契機化していることがよく分かる。

２－１　人間概念の三契機について

人間概念の三契機である人間的普遍性、社会的特殊性、身体的個別性はそれぞれどういう内実と関連とを有するものとして捉えるべきであろうか。

人間を包摂的に把握するというとき、全ての人間に妥当する人間的普遍性がやはり第一に

把握されなければならないという意味で、人間的普遍性は主導的契機であると解される。そのうえで、人間は社会のなかで生まれ、育ち、生活し、人生を終える存在であるという、人間の現実を捉えた現実的な人間存在を、人間的普遍性を実現し現実化するという意味で社会的特殊性の契機として把握することが必要とされる。つまり、すべて人間は特定の時代と社会において生きるのである。そして、特定の時代と社会において生きる人間はそれぞれに交替不可能な場を占めて、すなわち掛け替えのない身体を有して生きる個人である、という意味で身体的個別性の契機を把握することができる。

こうして、人間概念の三契機は次のように把握される。人間的普遍性は人間存在に関する全称判断・命題に対応して、全ての人間個体に言えることを意味し、人間たちの同一性を指示する。社会的特殊性は人間存在に関する特称判断・命題に対応して、特定の個体にしか言えないことを意味し、人間たちの差異性を指示する。身体的個別性は人間存在に関する単称判断・命題に対応して、単独の個体にしか言えないことを意味し、人間たちの単独性を指示する。

以上を集約的に表現すると、「全ての個人は、いつどこにおいても人間的普遍性を具備すると同時に、特定の時代と社会において社会的特殊性を身にまといながら、かけがえのない身体的個別性において生きる」となるであろう。

２－２　人間的普遍性の契機について

人間的普遍性の契機は、「人間以外」、あるいは「人間以上」などの問題提起をも射程に収めると、人類的普遍性・人間性と生命的同一性・生命性および根源的自然性・自然性の三重の位相を持つと把握されるべきであろう。

この三重の位相把握を科学的に基礎づけるものとして筆者は、理論物理学者の田中一の「自然の累層構造」論と惑星物理学者の松井孝典の「地球システム科学」とを参照している。

田中一は「自然の累層構造」を以下のように描く[20]。

主系列　　―クオーク・レプトン―素粒子―核物質―原子分子―巨視的物質―宇宙―
二次系列　（原子分子）―単細胞生物―多細胞生物―種―全生物
三次系列　（種）―知性体社会

三次系列は地球外知生体をも視野に置いているのであるが、人類的普遍性・人間性に照応し、生物系列である二次系列は生命的同一性・生命性に照応し、物質系列である主系列は根源的自然性・自然性に照応していると理解される。[21]

松井孝典は地球システムを基本的に物質圏（磁気圏・流体圏・固体圏）・生物圏・人間圏として捉える。地球システム科学の説明の冒頭の記述を以下に掲げる。

「地球システムは、磁気圏、流体圏、固体圏および生物圏と人間圏から構成されている。それぞれの構成要素内部では、複雑な運動と物質変化が互いに密接な関係をもって起こっていると同時に、互いにほかの要素から物質とエネルギーを受け取って、他の要素へと渡している。このような構成要素相互のやりとりが、地球全体としての挙動を規定している。」[22]

松井孝典自身は「日本地球惑星科学連合ニュースレター2008No.3」で、「人間圏」という規定は自らが定義した概念であると述べるとともに、その問題意識を以下のように述べている。

「人間圏が，生物圏という構成要素から分化し，地球システムに新たに加われば，地球システムはそれ以前とは状態が異なり，その物質，エネルギーの流れは変化する．

人間圏が，地球システムの駆動力に依存したフィードバック機構を利用する段階に留まれば，その変化は顕在化しない．しかし，それがその内部に独自の駆動力を持つようになると，人間圏は際限なく拡大し，すると，その変化が顕在化し，それに伴い，それ以前の構成要素の中身も変化する．われわれはそれを今という瞬間に，地球環境問題，資源・エネルギー問題，食糧問題， 人口問題など『文明の問題』として認識している．人間圏はこのような発展段階を経てきたと考えられるが，前者をフロー依存型人間圏，後者をストック依存型人間圏と呼び，区別する．

文明がストック依存型人間圏の段階（すなわち，人間圏が急速に拡大する段階）に達すると，その文明は宇宙を認識するレベルに達し，それと同時に自らの生存を脅かす文明の問題に直面する．これは，人間圏の急速な拡大に対する，地球システムからの負のフィードバックであるが，このことを筆者は，『文明のパラドックス』と呼んでいる．我々は今，人間圏を作って生き始めたときと同様の意味で，その岐路に立っている．その未来は，アルカディアなのか， ユートピアなのか，それはまた，維新なのか，革命なのか，という選択の問題でもある．」(23)

「我々は今，人間圏を作って生き始めたときと同様の意味で，その岐路に立っている」という問題意識は「文明のパラドックス」という表現で「消費文明」とも呼ばれる現代文明への問い、現代の人間への問いを提起しているのである。そして、「人新世」という問題は人類的普遍性に対応する「人間圏」（三次系列）が生命的同一性に対応する「生物圏」（二次系列）への破壊的浸食という問題として把握されることを示唆していると解される。

生物圏から分化して言語と道具で独自の人間圏を創出していることは、人間の生命的同一性における人間性、人間的生命性の独自性が示されていると把握される。この人間的生命性とは換言すると、自由な生命性のことである。生命体は生きることを絶対的自己目的とするが、人間は生きることを選択することができるという意味で自由な生命体であると把握される。

人間的普遍性における人類的普遍性では、人間がいつもすでに人間関係において存在し、しかも人間が人間として生きる上で共同的な人間関係が必須である、ということが重視されなければならない。詳細な説明は別稿を期したいが、人間が自他の相互承認（二者関係）において生きる存在であるとともに、三者関係における社会的承認において生活することは、人類的普遍性の基本であると解される。したがって、人類的普遍性は社会的特殊性において形態化・実現される。総じて、人間性は人間社会で現実化するのである。

２－３　社会的特殊性の契機について

社会的特殊性は人間たちの差異を指示するが、差異性は時間性として時代的差異、空間性として地理的差異、文化性として文化的差異、という三重の位相の社会的特殊性を有すると把握される。したがって、世界中の言語と文化の差異性・多様性は時間的・空間的・文化的特殊性を表現するものと解されるのである。

われわれ現生人類たるホモ・サピエンスの多様性は「後期旧石器時代の世界拡散以降の歴史の産物」であるとして、海部陽介は以下のように述べている。

「現在の地球上には、実に多様なホモ・サピエンスの言語や文化が存在するが、これも後期旧石器時代の世界拡散以降の歴史の産物である。古代文明が興ると、そうした文化の地域的多様性はさらに増し、やがて支配する集団と支配される集団との関係が生まれた。しかしこのような差異を、集団の優劣の反映と安直に考えるべきではない。グローバルヒストリーの観点から、どの地域でどのような文化が生まれるかは、その集団がたまたま移住した先の地政学的要因や歴史に強く作用されるとの認識が生まれている。（中略）つまりわれわれは特別な進化を起こすことなく、過去５万年ほどの間に後期旧石器文化を現代文明に変貌させ、技術や社会体制を飛躍的に発展させた。」（２４）

つまりは、時間性・空間性・文化性の差異が人間社会のあらゆる多様性の有力な源泉となっているのである。人間たちの意思疎通様式である言語と生活様式である文化における人類史的な地球規模的な多様性が人類的普遍性の多種多彩な発現として蓄積・継承されているのである。このような社会的特殊態における人類的普遍性の多種多彩な発現は、無限に豊かな身体的個別性において身にまとうかのように顕現することになる。

人間社会の多様性を、稀有な社会学者である見田宗介は、「現代人間の五層構造」として把握し、次のように述べる。

「われわれの遠い祖先が道具を製作し言語というコミュニケーション技術を獲得することを通して、『人間』という新しい生命存在の形式として立ち現れたということ自体を、『第０次』の産業革命と見ることもできる。四つの産業革命が次々と切り開いてきた人間史の四つのステージは、『継起的』なものであるというよりも、『重層的』なものである。第０次産業革命の結実である＜道具＞と＜言語＞は、『現代』に至る人間史のあらゆる局面の前提であり基底音である。第一次産業革命の結果である＜農耕＞と＜牧畜＞は、余裕のある人間生活の基礎として、工業化や情報技術化のあらゆる華麗な展開のステージの下で支え続けた。第二次産業革命の結実である＜工業＞生産力は、今日もなお『情報化』諸技術の先端的な展開の、ハードな前提であり続けている。『現代』社会は、『近代』社会の一部であり、『近代』社会は『文明』社会の一部であり、『文明』社会は『人間』社会の一部である。そしてその『人間』社会は地球の生命潮流の一部分である。」（２５）

筆者の私見では、見田の「現代人間の五層構造」を参照して、人類化革命、定住革命・農業革命、産業革命・市民革命、情報革命・「人新世」社会、という五つの画期として人類史を把握することができると考えられる。すなわち、人類化革命においては道具と音声言語及び人間社会の形成がなされ、定住革命・農業革命においては農耕文明と文字言語が出現して文明社会の形成がなされ、産業革命と市民革命とで工業文明・近代社会が形成され、情報革命・「人新世」社会という仕方で現代社会が形成されていると把握される。

生物圏からの人間圏の自立化は農業革命を節目とするが、その自立化は農耕文明が地球生命圏における食物連鎖をその頂点たる人類の意図的計画的な管理・維持によって可能とさせているのである。

見田が述べる「第二次産業革命の結実である＜工業＞生産力」は、「脱成長」（Degrowth）論議が盛んなように（２６）、「人新世」社会において疑問視されている。しかし、見田はその事態を見越しているかのように、現代社会を特徴づける「情報化」と「消費化」の向こう側を「もうひとつの、未だ名づけられてはいない革命」として以下のように述べている。

「このもうひとつの、未だ名づけられてはいない革命の方からふりかえって見るなら、

『現代』という過渡の局面を形成してきた二つの革命―生産の自己目的化を転回して『享受することの幸福』の本原性を復位する『消費化革命』と、マス・メディアの一方向性を展開して『交信』のテクノロジーを用意する『情報化革命』―は、この名づけられてはいない革命―人間と自然の関係／人間と人間の関係の双方における、＜共存することの祝福＞ともいうべきものを基軸とする世界を切り開く未知の革命―を、はるかに準備する転回であったということができる。」(26)

見田の言う「人間と自然の関係／人間と人間の関係の双方における、＜共存することの祝福＞」とは、生物圏と人間圏との共存による人間的普遍性を享受することの幸福が人間社会の未来として構想されることを示唆しているように思われる。

２－４　身体的個別性の契機について

身体的個別性は単独の人間個人にしか言えないことを意味し、人間たちの単独性を指示するのであるが、言語化するには極めて難しい契機である。身体的個別性に関する言語化は、いずれも言葉で表現できるギリギリの限界を踏み越えんとする臨界にあると考えられる。言語は少なくとも二者間で通用するものとして存在するがゆえに、単独の人間個人にしか言えないことには言語化は容易ではないのであり、まさに臨界に面しての表現はきわめて困難なものであろう。中心たる本質・意味を表現するために、多種多様多彩な言葉を積み重ねて表現する以外にない。

さしあたり、身体的個別性という契機は、人間たちが一回限りに限定された人生を過ごすという意味を込めての身体性という位相と、唯一無比の単独性というあり方の意味を込めての個別性という位相と、人間的普遍性と社会的特殊性が統合される契機であるという意味を込めての統合的求心性あるいは単独完結性という位相との、三重の位相を有するものとして理解することができる。

そのうえで、身体的個別性は人類的普遍性に含意されているがゆえに、人間の尊厳とはほかならぬ個人の尊厳であると解される。そして、身体性は一回限りに限定された生死性を意味し、個別性は唯一無比の孤独の単独性を意味し、統合的求心性が一回限りの自己の生死の閉じた円環たる完結性を意味すると把握される。

人間存在の単独性に関しては、「実存」という哲学用語で指示される事柄にも言及する必要があろう。ここでは実存主義思想にあえて立ち入ることはしないで、「ドイツ強制収容所の体験記録」という副題を持つ、ヴィクトル・エミール・フランクルの『夜と霧』（原著 1947 年刊行）に言及しておきたい。フランクルは精神分析学のいわゆる第三ウィーン学派として独自の「実存分析」を唱え、1930 年代から半世紀にわたって活動した。『夜と霧』の「第八章　絶望との闘い」のなかで次のように述べる。

「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるのかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。・・・・・・すなわちわれわれが人生の意味を問うのではなくて、我々自身が問われた者として体験されるのである。・・・人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである。この日々の要求と存在の意味とは人毎に変るし、また瞬間毎に変化するのである。従って人生の生活の意味は決して一般的

に述べられないし、この意味についての問いは一般的に答えられないのである。・・・・・・しかしどの状況もその一回性と唯一性とによって特徴づけられているのであり、それは具体的状況の中に含まれているのである。・・・・・・・何人も彼の代わりに苦悩を苦しみぬくことはできないのである。まさにその運命に当たった彼自身がこの苦悩を担うということの中に独自な業績に対するただ一度の可能性が存在するのである。」(27)

人間存在の単独性は、フランクルによれば一回性と唯一性とによって特徴づけられるのであり、どんな状況においてもその人間自身がその都度具体的に担い切るのでなければならないのであり、「唯一で一回的である人間の運命」から当の人間自身が問われているのである。

この身体的個別性の契機には生死の問題が不可欠な問題としてある。人間は生死を選択することができる唯一の生物種である。著名な医師である日野原重明は含蓄深く、次のように簡潔に述べる。「いのちとは時間であること。その時間には限りがあること。その事実を知っている人間だけが、いのちの使いかたを自分で考え、変えることができます。」(28)

つまり、生き物は死すべきものとして生まれる。死なないのは生命のない存在である。生きていない存在だけが死を免れる。生き物も、その一員である人間も、その真実は生まれて来て、生きて、死んで行く事にある。人間はこの真実を自覚する存在者である。さらに人間は、自己の来歴のみならず、自然の来歴も、生命の来歴も自覚しようとする存在者である。

そして、人間は確かに生き物の一員ではあるが、生きることが自己目的であるという事柄は動物においては本能的な事柄であるが、人間においては意欲され、選択される事柄としてある。つまりは、自己の生命を含めて全てを捨て去ることができるがゆえに、捨てるか捨てないかの選択可能性が常在するところに、人間の自由の根源があると考えられると同時に、そこに人間的生命の特質があり、生命を選択する自由な生命体であるということが身体的個別性という視野から了解することができるのである。

２－５　三契機による把握の仕方について

人間概念の三契機をそれぞれ考察してきたが、これら三契機による把握の仕方は同じ事象をめぐっても様々に可能である。例えば、生涯学習という事柄に関して、この言葉が一般化したのは 1960 年代以降とされるので社会的特殊性に属する言葉だと解釈可能であるが、人間の生涯学習可能性を意味する言葉として解釈すると人間的普遍性に属するとも解釈できる。多様な把握の仕方が可能であるということは、どの契機を主導的契機として把握するかは状況と文脈に応じてということであり、このような可塑性こそが人間の包摂的把握を可能にすると考えられる。

３．　人間のさらなる包摂的把握のために

以上、人間の包摂的把握の論理を人間概念の三契機とし、人間的普遍性・社会的特殊性・身体的個別性の三契機の考察を進めてきたが、このような包摂的把握の進化のために求められる事柄へのいくつかの言及をもってまとめとにしておきたい。

文化人類学者、松村圭一郎は「人間であることが困難な世界で」と題して、創刊 78 年目にリニューアルされた雑誌『世界』2024 年 1 月号において、次のように述べる。

「人間の『愚かしさ』が克服しがたいのは、それが人間の『賢明さ』と表裏一体になって

いるからである。多くの敵を殺すことが『戦果』とされ、いかにその軍事目標を効率的に達成できるかが、優れた『戦略的思考』とみなされる。同様に、人間であることを消去して人びとを効率的に管理し、一定の方向に導くことは、政治的な賢明さの証となる。つまり、『ユートピア』は『ディストピア』の対極にあるわけではない。それらは隣り合い、互いを支え合っている。むしろ『ユートピア』に目を奪われること自体が『ディストピア』を温存させているのかもしれない。

あらゆる人間の行動を数値データとして把握し、人工知能で処理する時代になりつつある。それが新たな未来をつくる希望の技術として語られることもある。しかしおそらく、すべての問題が技術によって解決される彼岸など存在しない。誰もが有用な目的のための手段として計量化される時代に、人間がいかに『人間であること』をつづけられるのか。そこに潜む暴力にどう向き合うのか。その問いは、なぜ人間が戦争の愚かしさから逃れられないのかを考えることと同じ地平にある。」(29)

そのうえで、「人間であることが困難な世界で」においては、「『人間であること』をあきらめないための拠点」は「等身大の目線に踏みとどまる思考」にある、と松村は言い切る。

「等身大の目線に踏みとどまる思考」とはどういうものであろうか？「いつどこにおいても人間的普遍性を具備すると同時に、特定の時代と社会において社会的特殊性を身にまといながら、かけがえのない身体的個別性において生きる」個人としての自覚に導かれる思考ではないだろうか。

「人新世」社会への対応として、カーボンニュートラルを実現する「脱炭素社会」構築が国際社会の共同目標とされている。現代の人間圏の物質圏への温室効果ガスの過剰な供給によって生物圏に破壊的影響を与えているがゆえの対応策である。「人新世」社会という社会的特殊態が、生命的同一性と根源的自然性に背反する事態を招き寄せていることによって、本来の共生可能性を本領とする人類的普遍性へのグローバルな覚醒が巻き起こっていると捉えることができる。換言すると、社会的特殊態において人間的普遍性が実現するという連関が、「人類の過誤」とも言うべき「人新世」社会という一面的な否定の連関という事態によって、新たな次元での回復・復権に動き始めていると捉えることができるのである。

「人新世」社会のメルクマールの一つとして原子核エネルギーの人為的利用がある。(30) 原子核エネルギーの「平和的利用」とされている原子力発電所から生み出される高レベル放射性廃棄物はその最終処分場で約 10 万年間保管されなければならない。(30) 現生人類が登場したのは古く見積もっても約 10 万年前であるから、現在までの現生人類の存続期間と同じ期間の保管時間となる。原子核エネルギーの人為的利用とは、現生人類の生存期間を 10 万年の少なくとも二倍以上であることを前提にしたものであることが分かる。根源的自然性に属する原子核エネルギーは放射能による遺伝子の損傷などによって生命的同一性を破壊するのであるが、そこに人類的普遍性を見いだすのか、あるいは特定の人間集団の系統的な利害と思惑を見るのか、という問題は人間的普遍性と社会的特殊性の連関問題として突き付けられている。人間の「賢明さ」は人間の「愚かしさ」と隣り合わせなのである。

2022 年 11 月 30 日対話 AI サービス「ChatGPT」が公開され、「ChatGPT」をはじめとする「生成 AI」の発展がいよいよ「ＡＩ新世」時代を迎えるのではないかという期待が一方であるとともに、安全な AI 開発の必要性が叫ばれ、実際に国際的な動きがすでに開始されてもいる。

人間の知的活動の代替あるいは模倣を特質とする AI は生命的同一性の基盤を持たず、社会的特殊性と身体的個別性の契機をも持てない。「身体的であること」が「言葉の本質的特徴」であるという最近の研究に照らすと（31）、「ChatGPT」などの「生成 AI」の展開が人間の言語活動に全面的に代替することがあり得るとは想定できない。むしろ、「AI 新世」は、人間の知的活動が生命的同一性や身体的個別性や社会的特殊性などを基礎として遂行されることを軽視ないし無視する危険性を伴っていると考えられる。すなわち、「誰もが有用な目的のための手段として計量化される時代」が危惧されるのである。「AI 新世」への対応は、人間的普遍性・社会的特殊性・身体的個別性の内実とその連関とを隠蔽することによって、現生人類の誤解を招いてしまう危険性をいつも潜めているのである。

他方では、「人間を超えた人類学」として展開されようとしている「マルチスピーシーズ人類学」は、人間を人類的普遍性のみならず生命的同一性と根源的自然性という視界へと開いていくものであり、従来の人間への視野狭窄的把握を超えて、文字通りに包摂的な把握へと迫っていくものであると考えられる。これまでになく豊かな人間把握・人類理解が期待される。人間把握・人類理解は、排他的ではなく（ not exclusive ）、より包摂的な（ more inclusive ）ところに前進することが期待されるのである。

人間概念の三契機は人間を超えた包摂的把握の論理の視界をも開くと理解できるものである。試論的に表現すると、以下のようになろう。

＜人間概念の三契機＞	＜生命概念の三契機＞	＜物質概念の三契機＞
人間的普遍性	生命的普遍性	質料的普遍性
社会的特殊性	集団的特殊性	形相的特殊性
身体的個別性	生物的個体性	物質的個物性
・人間圏・三次系列	・生物圏・二次系列	・物質圏・主系列

人間を包摂的把握する営みは人間圏に留まるものではなく、生物圏と物質圏へと開かれていく人間の知的営為なのである。

「性の多様性」はより包摂的な人間把握にとって極めて重要であろう。藤田由美子は「性には、『身体の性』、『性表現』、『心の性』、『好きな相手』の 4 つの次元がある」と述べ、「仮にそれぞれを『女性／男性』の二分割にしたとしても、少なくとも 16 種類の組み合わせが存在」し、男女の限定がなければ「性の可能性は多種多様である」とともに、このような多種多様性は離散的ではなく連続的でもあると述べている（32）。

社会的文化的に形成されたジェンダー（社会的性差）の画一的固定性は社会的特殊性の契機の自立的全体化として把握されるのであるが、身体的性差とされる男女性別そのものも社会的特殊性の自立的全体化であることが上記引用からも判明する。「性の多様性」は、その現実を社会的特殊態に左右されながらも、かけがえのない身体的個別性の契機に属するものとして把握され、人間的普遍性に連結する個人の尊厳の内実を占めるものである。性に関してはとりわけ、社会的特殊性と身体的個別性の錯綜を回避することが重要なのである。

性に関する社会的特殊性と身体的個別性の錯綜とはいわば真逆の錯綜が問われているのが「障害者差別」であろう。2006 年 12 月に国連総会において採択され、2008 年 5 月に発効した障害者権利条約ではその第二条において、「障害に基づく差別」と「合理的配慮」および「ユニバーサルデザイン」について以下のような定義を与えている。

『障害に基づく差別』とは、障害に基づくあらゆる区別、排除又は制限であって、政治的、

経済的、社会的、文化的、市民的その他のあらゆる分野において、他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を認識し、享有し、又は行使することを害し、又は妨げる目的又は効果を有するものをいう。障害に基づく差別には、あらゆる形態の差別（合理的配慮の否定を含む。）を含む。

『合理的配慮』とは、障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。

『ユニバーサルデザイン』とは、調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう。ユニバーサルデザインは、特定の障害者の集団のための補装具が必要な場合には、これを排除するものではない。」

「障害」に対する合理的配慮とは「政治的、経済的、社会的、文化的、市民的その他のあらゆる分野」において起こり得るものであり、その意味で「障害」とは社会環境依存的なものなのである。したがって、以下の言明はきわめて重要であり、社会的特殊性の問題を身体的個別性の問題へとすり替えることのない理解が必要なのである。

「人への多様性への配慮が理想的に行き届いたところには障がい者はおらず、だれにも容赦しない過酷な環境には健常者はいない。そして中間的な環境には健常者と障害者がいる。そしてそのような中間的な環境では、多数者への配慮は当然のこととされ配慮とはいわれないが、少数者への配慮は特別なこととして意識される。」(33)

ところで、篠原雅武は「人新世を生きる」という副題を持つ著作に『「人間以後」の哲学』（講談社 2020 年）という題名を与え、「はじめに」で以下のような問題意識を述べている。

「二〇〇〇年代後半以降、哲学的な思考は『人間から遠のく世界』や『人間不在の世界』に向かっている。人間から離れていて、人間から遠のく世界。人間には達することのできない境地にある世界。たとえ人間がすべて消えても、人間が定めた名前や文類のための図式がすべて消えても、それでも残ってしまうものとしての世界。私たちは、そのような世界にとりまかれ、浸透されている。私たちは、そのような世界に対峙し、思考を新たに始めようとしている。問われているのは、人間が自分たちの生存のために形成してきた人為的秩序としての人間世界と相関しない世界であり、この世界ゆえに、自然な秩序とは区別される人為的秩序が、脆く、定まらないものとして成り立ってしまっている、という現実である。（中略）

『人間以後』を問うことは、人間の消滅を意味しない。それは、世界の変容とともに、人間のあり方もまた変わってしまったことを認め、そのうえで、人間がどうなっているのか、人間がどのようなものとして生きるのかを問うことを意味している」。(34)

「『人間以後』の哲学」もまた、「人間がどうなっているのか、人間がどのようなものとして生きるのかを問うこと」が主題なのであり、人間の包摂的把握の試みなのである。

人間の包摂的把握の試みである人間概念の三契機把握は、宇都宮三契機論から出立してもいた。宇都宮の遺稿である『人間の哲学の再生にむけて』の「あとがき」は人間の包摂的把握に向けて以下のように述べている。

「『私（自己）とはなにか』という問いと『人間とは何か』という問いは、これまでいずれも哲学の重要な問題として問われ続けてきた。しかし、この二つの問いがそれぞれ別の問

いとして分離されてしまうと、いずれも哲学の途を踏み外す危険にさらされることになる。『私とはなにか』という問いにだけ固執すると、そこから自我中心的、独我論的な世界解釈が出現し、自我と他者を含む人間の世界が見失われがちになる。他方、『人間とはなにか』という問いは、そこに『私とはなにか』という問いが脱落すると、人間を端に類として捉え、社会学や生物学の研究対象とするといったような科学と同じレベルの論議に追い込み、哲学の途は断たれてしまう。哲学にあっては、この二つの問いはつねに不即不離の関係にあると見なければならない。そしてこの二つの問いを結びつけるには、人間をまず『自己』と『他者』の『間』として、つまり人『間』として捉え、しかも互いに相手を自己の客体として扱うのではなく、互いに相手を自立した主体として扱うことがいかにして可能であるかを問う必要がある。私が『相互主体性の立場』とよぶのはこうした哲学の立脚点であって、倫理的な諸問題も、この相互主体性の場に注目することではじめて解明可能となるであろう。旧著『人間の間と倫理―倫理基準の検討と倫理理論の批判』（以文社、1980 年）や、放送大学でテキストとして使用した『倫理学入門』（放送大学教育振興会、1997 年）は、こうした相互主体性の立場から倫理学的諸問題の開明を試みたものである』。（35）

「相互主体性の立場」は「自他の相互承認（二者関係）」と「三者関係における社会的承認」として捉え直すことができると筆者は考えているが、これらの主題的な展開は今後の課題として残されているのであり、人間の包摂的把握の進化に向けての今後の課題である。

人間の包摂的把握の進化にとって、「世界人権宣言」が重要な参照点となることを最後に強調しておきたい。というのも、人間的普遍性・社会的特殊性・身体的個別性の三重の側面をその全てにわたって認め、尊重することを人間社会の基本とすることが人権の基本的な考え方であるからである。すなわち、一人一人が、その出自や心身の程度の違いに関わりなく、時代や社会の違いにも関わりなく、譲り渡すことのできない固有の尊厳を持つ人間として相互に尊重されることが、人権の基本的な考え方である。

1948 年の世界人権宣言は、20 世紀の二つの世界大戦の痛切な経験を教訓として、固有の尊厳を持つ人間たちの相互尊重を世界の全ての地域で実現・定着させるために出され、さらに 1989 年に採択された「子どもの権利条約」は世界人権宣言の精神をさらに具体化したものと考えられる。

世界人権宣言は 1948 年 12 月 10 日に採択された。国際連合広報センターの日本語ホームページでは以下のように解説している。

「30 条からなる人権宣言は、すべての国のすべての人が享受すべき基本的な市民的、文化的、経済的、政治的および社会的権利を詳細に規定している。

人権宣言の第 1 条と 2 条は『すべての人間は、生まれながらにして尊厳と権利とについて平等である』と述べ、『人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治その他の意見、国民的もしくは社会的出身、財産、門地その他の地位によるいかなる差別を受けることなく』世界人権宣言に掲げるすべての権利と自由とを享受できると規定している。」（36）

世界人権宣言の内容とその後の内容の豊富化は、現代社会が到達している人類的普遍性の到達内容の定式化を示すものであり、この人類的普遍性には社会的特殊性と身体的個別性の契機が含有されているものであるが、現生人類の自覚的到達点であると考えられる。

現代は人間が問われる時代であるとして人間の包摂的把握に向けて論述してきたが、現代が問う人間の自己反省の立脚点は第二次世界大戦後の 1948 年をその基点にしていると考えら

れるのである。戦後世代であり、団塊の世代でもある筆者にとって、人間の包摂的把握の試みは自らの拠り所となるアイデンティティの重要な核心を成しているのであるが、包摂的把握のための自己批判的反省の言語化の営みはいまここにおいて始動したばかりでもある。

脚注・引用文献

(1) 総合人間学会ホームページ学会書籍（http://synthetic-anthropology.org/?page_id=50 2024年2月1日閲覧）

(2) ヨハン・ロックストローム（2021）「２０２１人類社会の課題」『世界』5月号102頁、岩波書店

(3) 同上103頁

(4) 環境報告研「地球環境概観 第5次報告書」下（国連環境計画UNEP編纂）https://www.hokokuken.com/pdf/Echapter.pdf#page=1　2024年1月24日閲覧

(5) 人工知能学会「What's AI 」https://www.ai-gakkai.or.jp/whatsai/AIwhats.html　2024年1月25日閲覧

(6) 松尾豊・塩野誠（2014）『東大准教授に教わる　『人工知能って、そんなことまでできるんですか？』KADOKAWA、14頁

(7) 『Newton』2024年1月号87頁

(8) ユヴァル・ノア・ハラリ（2016）『サピエンス全史　下』（河出書房新社2016年）241頁

(9) 同上書244頁

(10) 同上書264頁

(11) 奥野克巳（2022）『絡まり合う生命』亜紀書房、346頁

(12) 奥野克巳・シンジェルト編（2021）『マンガ版マルチスピーシーズ人類学』以文社、9頁

(13) 同上書33頁

(14) 奥野他編（2021）『モア・ザン・ヒューマン』以文社、25～26頁。

(15) 片桐雅隆（2022）『人間・ＡＩ・動物―ポストヒューマン社会学―』丸善、5頁

(16) ヘーゲル『小論理学』164節註解（『ヘーゲル全集第1巻』岩波書店1996年）

(17) 宇都宮芳明（1997）『倫理学入門』放送大学教育振興会発行。ちなみに、本書は現在「ちくま学芸文庫」で出版されている。

(18) 同上書32頁

(19) 同上書32~33頁。筆者は1999年に「アイデンティティの経験」を論じた末尾で、アイデンティティは多様な位相において考察されるが、「多様な位相において、人間的普遍性・民族的特殊性・身体的個別性の三つが重要であると思われる」（札幌唯物論研究会編『唯物論』第44号1999年10月、53頁）と述べたのが、人間的普遍性・社会的特殊性・身体的個別性の三契機把握の最初である。そして、宇都宮芳明の人間三契機論と密接な連関があることは当時全く無自覚であった。宇都宮芳明は筆者の大学院時代の指導教官であり、かの『倫理学入門』は「橋本信様　恵存」として贈呈された著作であるにも関わらず、3年ほども無自覚なままであった。ハイデッガー哲学から出発しながらカント哲学を終生追究した宇都宮芳明は、当時の院生の要望に応えてヘーゲル「法哲学」　のゼミを開催し、筆者のヘーゲル「法哲学」研究の修論の指導教官であった。ヘーゲルのカ

ント批判については筆者と立場を異にしていたのは言うまでもない。

(20) 田中一（1985)『未来への仮説』(培風館）103 頁に基づいて筆者作成

(21) 田中一の情報過程論も含蓄の深いものがあり、AI などの機械情報過程が三次系列外ではないのかという筆者の質問に含み笑いで答えなかったことを想起すると、二次系列に属する生体情報過程の発展形としての三次系列の社会情報過程の進化として、AI などの機械情報過程は量子コンピュータを含む主系列の物質情報過程に関連するとも想定される。「情報圏」概念が有効であるとすれば、それは三つの圏を跨ぐと捉えられ、これとは別に「機械情報圏」が想定可能であるが、量子コンピュータの実用化次元では「物質情報圏」と「機械情報圏」の融合の把握も可能であると考えられるのではないか。

(22) 『岩波講座　地球惑星科学２　地球システム科学』1 頁（岩波書店 1996 年）

(23) 松井孝典（2008)「人間圏とは何か？」(日本地球惑星科学連合ニュースレター2008No. 3）1−3 頁

(24) 海部陽介（2021)「第 3 章　ホモ属の『繁栄』」(井原他編『人間の本質にせまる科学』（東京大学出版会 2021 年）所収、56~57 頁

(25) 見田宗介（2012)『定本　見田宗介著作集Ⅶ』１５~１６頁（岩波書店２０１２年）

(26) 中野佳裕の簡潔な紹介によると、「脱成長は経済成長の対義語でもなければ、マイナス成長のことでもない。その目的は、消費を過剰消費する先進産業社会に対して『限度の感覚』を導入し、資源節約的でエコロジカルな脱消費社会に移行することにある。そうすることで、人類の生存に必要な最低限の社会的・環境的な公平さを回復することを目指している。」(中野佳裕（2022)「人新世と人工知能の時代における脱成長」総合人間学会編『人新世と AI 時代における人間と社会を問う』本の泉社 2022 年、59~60 頁）

(26) 見田宗介（2012)『定本　見田宗介著作集Ⅶ』21 頁（岩波書店２０１２年）

(27) フランクル（1982）霜山徳爾訳『夜と霧』183~184 頁（みすず書房 1982 年新版第 21 刷）

(28) 日野原重明（2012)『いのちの使い方』小学館文庫 82 頁（小学館）

(29) 松村圭一郎（2024)『世界』１月号 159 頁（岩波書店）

(30) 「フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』」では、「人新世の特徴は、地球温暖化などの気候変動（気候危機)、大量絶滅による生物多様性の喪失、人工物質の増大、化石燃料の燃焼や核実験による堆積物の変化などがあり、人類の活動が原因とされ」、「核実験による堆積物の変化」が挙げられている。(「最終更新 2023 年 11 月 12 日（日）16:46」を閲覧）

また、以下の報道にも注目すべきである。

＜「核のごみ地層処分『日本に適地ない』　地質学者らが声明」: 声明は「世界最大級の変動帯の日本に、地層処分の適地はない」と題し、地震活動が活発な日本では欧州と異なり、地中で１０万年間安定的に保管することは不可能だと指摘。「政策を抜本的に見直すべきだ」として、処分方法が決まるまでは核のごみを地上で保管することなどを求めている。有志グループは東京都内で会見し、「地殻の変動が（核のごみの影響を広げる恐れがある）地下水を呼び込むことが最大の問題だ」と強調した。声明は経済産業省や原子力規制委員会などに送付する予定。＞

（北海道新聞 2023 年 10 月 30 日）https://www.hokkaido-np.co.jp/article/933402/

(31) 今井むつみ／稲田喜美（2022)『言葉の本質』中公新書 261 頁（中央公論新社）

(32) 藤田由美子（2018）「つくられる性」植上・伊藤編『日常のなかの『フツー』を問いなおす』（法律文化社 2018 年）所収、「第 3 部　性」「第 7 章　つくられる性」97~98 頁

(33) 広瀬・関根編著（2019）『改訂版　情報社会とユニバーサルデザイン』128 頁（NHK 出版）

(34) 篠原雅武（2020）『「人間以後」の哲学』３頁（講談社 2020 年）

(35) 宇都宮芳明（2007）『人間の哲学の再生にむけて』274 頁（世界思想社 2007 年）

(36) 国際連合広報センター＞主な活動＞人権＞人権文書＞国際人権章典 https://www.unic.or.jp/activities/humanrights/document/bill_of_rights/　２０２４年２月１日閲覧。ちなみに、国連憲章前文の以下の理想と目的の表明は、複雑な想念が巡るのではあるが、現在においても有効であろう。

「われら連合国の人民は、われらの一生のうち二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い、基本的人権と人間の尊厳及び価値と男女及び大小各国の同権とに関する信念を改めて確認し、正義と条約その他の国際法の源泉から生ずる義務の尊重とを維持することができる条件を確立し、一層大きな自由の中で社会的進歩と生活水準の向上とを促進すること、並びに、このために、寛容を実行し、且つ、善良な隣人として互に平和に生活し、国際の平和および安全を維持するためにわれらの力を合わせ、共同の利益の場合を除く外は武力を用いないことを原則の受諾と方法の設定によって確保し、すべての人民の経済的及び社会的発達を促進するために国際機構を用いることを決意して、これらの目的を達成するために、われらの努力を結集することに決定した。」（国際連合広報センター＞基本情報＞国際連合：その憲章と機構＞国際連合憲 https://www.unic.or.jp/info/un/charter/）